氏　　名	WORACHANANAN Phayoon（ﾜﾗｼｬﾅﾅﾝ ﾊﾟﾕﾝ）
学位の種類	博　士（芸　術）
学位記番号	甲第51号
学位授与日	平成25年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	**現代社会における集団を代表するイメージ** **－ステレオタイプを超えて－**
審査委員	主査　教　　授　　西　嶋　憲　生 副査　教　　授　　久保田　晃　弘 副査　教　　授　　秋　山　　孝 副査　東京造形大学　教授　　岡　村　多佳夫

内　容　の　要　旨

この論文は、アートおよびデザインによって、ステレオタイプを最小限に抑えながら、現代社会における集団を代表するイメージを構築、記録、および普及する方法を摸索するという研究である。理論の領域では、これまでのアーティストやデザイナーの作品を研究し、実践の領域では、自分の作品を用いた実験を行なった。

なお、私の職業はデザイナーだが、この作品は顧客向けではなく、自発的なものである。また、観察・記録によるもののため、内容は、作品を制作するにしたがって発見されていくという性質のものである。このような普及により、この研究は、異なる社会の人々に対する理解を構築や、自身の社会への理解を深めるのに役に立つのではと考えている。

第１章では、現代イラストレーションについて、過去のイラストレーションの様式と比較しながら分析し、アートの世界における私の作品の位置付けを行なった。現在は、テクノロジーの時代であり、デザイナー、アーティスト、イラストレーター、その他の人々が業界の枠を越えて作品を共有できるようになっている。そのため、現在、アートとデザインにおける分野の境界線は、曖昧になりつつあると言える。そのため、私自身が一体何に分類されるのか、定義することも難しいが、今、私が行なっている活動の目的から言えば、アーティスト・ジャーナリストに近いということができる。というのは、観察と発見により、記録したものをできるだけ多くの人に伝えることを一次的な目的としているからである。

第２章では、デザイン作品上の過剰なステレオタイプによる影響について、研究した。ステレオタイプは、デザインにとって有用な手法である。しかし、一方、デザイ

ナーの創造性を狭める要因の一つともなり得る。また、デザイナーの側が様々なメディアによってステレオタイプを広めているという現象も見られる。この章では、グラフィック・アートおよびイラストレーションを中心としたデザイン作品に使われている様々なステレオタイプを挙げ、ステレオタイプが必要な理由についての理解を固めると同時に、ステレオタイプが作品の信頼性に及ぼす影響も考察した。更に、写真作品におけるステレオタイプについても考察し、テクノロジーが高度に発展している現代では、写真が絵より信頼性の高いものだとは言えなくなってきているということを示した。

第３章では、作品の方法について、研究した。ここでは、ステレオタイプを脱却した新しい制作方法の摸索を行なっている。目的は、イラストレーション作品として制作する集団のイメージに信頼性を与えること、および、従来の思考方法を脱却し、新しい方法を採用することによる創造性の向上である。なお、ここで、私が採用した方法は、現場を観察し、情報を収集するというものである。

第３章の前半では、様々な観察の手法について分析した。ここで取り上げた過去の作品は、（１）エドワード・ホッパーによるパリの人々のスケッチ（自分に馴染みのない社会の人々を観察）（２）今和次郎による西洋人のスケッチ（同）（３）フランクリン・マクマホンによるスケッチ（同一社会における異なる状況下の人々を観察。対象との関連性を断つ努力がされており、作品への主観の混入を回避している）（４）今和次郎による統計作品（往来する人々を観察し、自身が属する社会を観察）（５）アラン・ローハン・クライトの作品（新たな視点を提唱）―である。これらの作品を参照し、質および目的の両面で、私の作品に適する観察方法を摸索した。

第３章の後半では、作品の表現に採用した類型学および単純化の手法についての研究を示した。類型学は、外観から分類するという方法である。この研究では、類型学を用いた写真家３グループ、すなわち、（１）アウグスト・ザンダー（服装によって集団を分類）（２）ベッヒャー夫妻（外観の類似した作品をセットとして並べて発表）（３）アーリ・フェルスラウスとエリー・アウテンブルーク（両者を合わせたような作品を制作）―の例を挙げた。これらは、私の作品に類似しているが、私は更に一歩進め、同一のセットに含まれる写真をまとめて、それらを代表する一つのイメージを構築した。イメージ構築においては、単純化の手法を取り入れ、試行錯誤を繰り返した。

単純化は、見る人の視覚に関連するもので、これまで、単純化された画像の知覚に関する研究が行なわれてきている。ここでは、複数のアーティストの作品によって、図と地の重要性についても研究した。例えば、ピクトグラム、幾何学模様、オブジェクト・ポスターのスタイルなど、主題を邪魔することのない的確な単純化のポイントを摸索した。

最後の第４章では、実践、すなわち実験について示した。なお、前述の研究の全ての過程は、実験および作品発表と並行して行なったものである。ここでは、前述のプ

ロセスを経る前の作品について、作品の改善・問題解決について、および、タイと日本の両国での作品発表・相違点の分析について述べた。また、タイでは、二度目の作品発表も行ない、私が日本に来る前と日本に長期間住んだ後との間の相違も考察した。

この研究により、 私自身、既製の物事から脱却するという大きな挑戦をすることとなった。しかしながら、それにより、新たな問題点を発見し、問題解決の方法を摸索することができた。研究成果は、デザイン作品全般におけるステレオタイプの問題について理解を深め、解決方法を見出すために役立つものにもなったと考えている。

審 査 結 果 の 要 旨

パユン・ワラシャナナンは、タイの大学でデザインを学んだ後、デザイナーとしての実務経験を積み、その後 2006 年から多摩美術大学の大学院でイラストレーションの制作と研究を続けてきた。彼女は来日時にそれまでメディアを通して知っていた日本のイメージとは違った現代日本の文化、ファッション、風俗、日本特有の事物などに触れたことから制作を始め、それが次第に「トウキョウ」シリーズ（“Common People:Tokyo”と“Insignificant Tokyo”の２系列がある）のプロジェクトとなっていった。東京の町中で見かけるさまざまな日本人のタイプを収集・分類しながら自分のスタイルで描き、それが蓄積されていくことで現代日本の人間像が描き出され、集積していくというもので、日本人にとっても興味深い文化研究的作品である（2011 年からは母国を対象に「バンコク」シリーズとして“Common People:Bangkok”と“Insignificant Bangkok”も開始した)。

このシリーズは注文によらない自主制作のプロジェクトであり、東京やバンコクのギャラリーや大学で何度か発表、一部はタイの雑誌やガイドブックにも掲載されている。一見すると都市の単純な人間スケッチに見えるが、明確な目的で類似した外見や行動をとる人々を収集・分類し、単純化のプロセスをへて一点ずつの作品に集約・抽象化されたもので、プロジェクトとして長期的に展開されている。それは個人的な印象や自己表現を主眼としたものではなく、いかに正確な情報をイラストレーションとして視覚化するかという課題に対して、方法を自覚的に検証しながら、人物の単純化のレベル、風景や背景の入れ方などを実験し、模索していった成果なのである。

学位請求論文（英文)「Representative Images of Collective Behavior: Beyond Stereotypes (現代社会における集団を代表するイメージ：ステレオタイプを超えて)」は、この自身の自主制作的プロジェクトの背景となる概念や現代のイラストレーションのあり方を調査研究し、さらに自身の制作手法をさまざまなのアーティストたちの作品と比較しながら論じたものである。

イラストレーションという表現分野は、当初はファインアートとの境界がきわめて

明確であり、注文を受けて制作されるグラフィックな（印刷を前提とした）ヴィジュアルイメージ、あるいは外国語においてはテキストに付随する図解・挿絵といった意味で使われてきた。しかし、本論文の第一章で詳しく論じられている通り、現代のイラストレーションはそのような定義や境界が見直されるべき状況にあり、デザインとアート、イラストレーションとファインアートの境界は曖昧化し、古い単純な定義で区分けすることができなくなっている。そこで再びイラストレーターとは何かについての古典的な議論（ノーマン・ロックウェルやエドワード・ホッパーら）も読み直す必要が出てきている。

第一章では、今日におけるイラストレーションの定義のほか、自身の作品の位置づけとして「ジャーナリスト（またはレポーター）としての画家」(Artist as journalist/reporter)とされる人々を通して「絵による記録」の問題、つまり、描かれた絵でありながら正確さ(accuracy)を保った記録でもある作品の系譜や実例を取り上げて考える。

さらに第二章では、より具体的・理論的に、ステレオタイプ化されたイメージをデザインの分野ではどう扱うべきか、またそこに含まれる社会的な偏見やイデオロギーを避けるにはどうすべきか、という問題が考察される。ステレオタイプは社会科学においては差別や偏見を助長するネガティブな概念として扱われるのが通例だが、デザインの分野では効率的なコミュニケーションやメッセージ伝達のために有効であることを確認した上で、ステレオタイプ・イメージ（自分の目で観察されていない既成イメージ）を無自覚に使ってしまうことがデザイナーの創造性をいかに阻害するかを、さまざまな事例（フォトジャーナリズムを含む）を挙げて、論が進められる。

第三章では、自身の観察に基づく「正確な」イメージをどのように構築できるか、そのためにどのような手順を踏むべきかを、作家側の「観察」「分類」「単純化」のプロセスとして考察する。「観察」では、観察者が当該コミュニティの成員（インサイダー）か部外者（アウトサイダー）かにも着目しつつ、自文化以外の人々をスケッチしたエドワード・ホッパーや今和次郎、自分の社会の事件や人物を新聞のために描いたフランクリン・マクマホン、黒人コミュニティをインサイダーの視点から描いたアラン・ローハン・クライトを比較対照し、観察者のポジションと正確なデータ収集などを考察。「分類」では、タイポロジー（類型学）の方法に着目し、アウグスト・ザンダーの肖像写真（一人の人物で一つの集団を代表）、ベッヒャー夫妻のコンセプチュアルな風景写真（外観の類似をグループ化して提示）、アーリ・フェルスラウス＆エリー・アウテンブルークの「エクザクティチュード」シリーズ（さまざまな国で似たファッションや髪型の人をグループで提示）の違いや問題点を考察し、そのなかで自身の方法を位置づける。「単純化」では、オットー・ノイラートのアイソタイプ、チャーリー・ハーパー、ルトヴィッヒ・ホールヴァインらを参照しつつ、自身の単純化のレベルを検証する。

以上の議論を前提に、第四章では冒頭で紹介した自身のプロジェクトの経過と実験について、ベクター・グラフィックによる技法を含め、詳しく紹介し、論じている。

本論文が取り上げたような多様化・現代化したイラストレーションについては、わが国では専門研究者も少なく、歴史的・理論的な研究は手つかずに近い状態のようである。本論文はこうした重要な今日的問題に対し、自らの制作をベースとしながら論じたもので、今後のイラストレーション研究に対する作家側からのアプローチを示す実技系研究(Practice-based research)として評価すべき論考といえる。英語文献を中心に多くの文献を渉猟・引用しながら論じており、独自性も随所に見られる。イラストレーション表現としては主観性やデフォルメをもっと肯定的に考えたり、ロシア構成主義やデ・ステイルなども参照すべきではあろうが、自作に関連させて本質的問題を論じた論文として十分評価に値するものといえる。これらの点を総合して、審査委員の総意として、本論文を博士学位授与にふさわしいものと判断した。

（西嶋　憲生）